炭都の娘はうたごえに乗って ドンと掘れ黒ダイヤ　夕張娘

山中　憲治（やまなか　けんじ）

1949年小樽市生まれ。72年北海道大学法学部卒。同年北海道開発庁（現国土交通省）入庁。建設省（当時）建設振興課長補佐、北海道開発局総務課長などを経て、北海道開発局開発監理部長で退官。その後（財）北海道河川防災研究センター（現（一財）北海道河川財団）、北海道建設業信用保証（株）に勤務し、20年退職。東京都在住。

1　夕張娘と炭鉱

「夕張娘」？電器屋さんのお嬢さんで、とんねるずの「雨の西麻布」に出てきた双子のリリーズ？「好きよキャプテン」。この曲を覚えている方もおられるだろうけれど、残念ながらこのお二人のことではない。

「夕張娘」は炭住に暮らす娘達の歌なのだ。

石炭は自前で賄える貴重なエネルギー源だった。

そして、石狩炭田は常磐（じょうばん）、筑豊（ちくほう）と並ぶ三大産地で、北海道は日本の石炭埋蔵量の半分を占めていたから、初期の北海道総合開発計画の柱でもあり、昭和30年代に小学生だった私は、社会科で、北海道の炭田は石狩炭田（南の空知炭田と北の夕張炭田とに分かれていた。）、留萌炭田、天北（てんほく）炭田、釧路炭田と習ったものだ。

石狩炭田は日本最大の炭田だった。

当時私の住んでいた市に炭鉱は無かったが、石狩炭田から石炭を運んできた貨車が船積みを待って埠頭（ふとう）に列をなしていたし、一流企業だった北炭（北海道炭礦汽船）の出先もあり、同級生が住むその社宅は立派で、服装からしてその他大勢とは異なっていたから、石炭の威力は子どもにも分かり易かった。

2　うたごえ運動

関鑑子（あきこ）という名を聞いたことがおありだろうか。

うたごえ運動の指導者で、戦前からプロレタリア活動家として有名だった声楽家（1899～1973）である。

うたごえ運動（「歌声」ではないのは、当時の勤労青年の誰もが読めるようにという趣旨）は、日本共産党の大衆社会運動として出発しており、その下部組織が作った「日本青年共産同盟中央合唱団」（1948.2関鑑子が指揮者）が母体であるが、同合唱団は1951年に「中央合唱団」と改称している。

強権的な戦時社会体制や悲惨な戦争の記憶が国民の多くに肉体化されていた時代だ。

反戦平和の歌を多く含むのは当然として、戦時の抑圧への反動から享楽性に満ちていた流行歌や敗戦日本の劣等感を掻（か）き立てるような進駐軍の音楽などとは異なる新しい歌や、生活に根ざして親しまれてきた民謡も多く取り上げられた（NHKのラジオ歌謡や文部省唱歌も一部含まれている）。

全国うたごえ協議会による運動は現在も存続しているが（狭義の「うたごえ運動」はこれを指す）、運動は昭和30年代までが全盛で、全国の職場や、学校、地域に合唱サークルがあった。

一方、街でもいろいろな歌を歌いたいという人達は当然いるわけで、仲間同士の合唱の範囲を超えて集う歌声喫茶が各地に誕生する。

歌声喫茶は、主にアコーディオンを弾く歌唱リーダーの指導の下に客が合唱する喫茶店で、ススキノにあった歌声ビアホール「ローレライ」（ご存じない？）の喫茶店版と考えて貰えば分かりやすい。有名な東京新宿の「灯（ともしび）」の他[1]、「カチューシャ」「トロイカ」などの名の店が全国各地にあった。勿論（もちろん）、道内にも。

歌手のさとう宗幸や故上条恒彦はこの歌唱リーダー出身だ。

中央合唱団は、1952年に来道し石狩炭田の各炭鉱で歌唱指導を行っている。

炭鉱の全盛期であり、合唱の集団性もあって、うたごえ運動は労働運動と結びつく。北海道炭労（炭鉱労働組合）主催による第１回「北海道炭鉱のうたごえ」は、1955年、美唄市の三井美唄互楽館（炭鉱全盛期を反映する道内最大級の劇場で、この年の新築。現存）で開催され、他産業からも参加している。

当時の炭鉱は、北海道労働運動の中核だっただけではなく、文化活動の中心でもあった。

3　青年歌集

うたごえ運動は、合唱を初心者にも分かり易く普及させたことや各地への巡回指導に特徴があったが、もう一つの特徴が「青年歌集」の発行である。

中央合唱団とは別に行われていた「みんなうたう会」での歌をまとめ、1949年に発行されたものを基に、1951年に第１篇が刊行されると忽（たちま）ちベストセラーとなり、第10篇まで出版された（他に特集篇がある）。

小さな歌集で、表紙では如何（いか）にも勤労青年・学生という感じの人々が歌っている。

時代の雰囲気なのだろう、今見ると、あるべき民衆像というか純朴さと生真面目さ満開である。

多くの人がこの歌集を手に歌っていたのだ。

青年歌集第1篇 音楽センター
1953改訂版発行 1961年再版
（筆者蔵）

掲載されている歌は、民謡（世界･日本）が一番多く、次に反戦歌、労働歌や世界の歌曲が並ぶ。

共産主義・社会主義運動色が濃いが、次第に日常生活を題材とする歌が増えていく。

「民族独立行動隊の歌」など民族意識と闘争心の高揚を訴える日本の創作曲は、今聞いてみると、戦時中までの愛国歌謡と底辺で繋（つな）がっていそうな歌詞とメロディー。

戦時中に国民を慰撫（いぶ）・鼓舞する健全娯楽として当局御用達だった音楽（「厚生音楽」という[2]）に繋がるような歌や､厚生音楽のポスターと似ている表紙など、「健全な音楽」による社会運動の底流はなかなか変わらないものだと感じさせられる。

一方、歌声喫茶では独自の歌集が発行された。こちらは、より広範な歌が載っていて、店によっては歌謡曲まで掲載されていた。

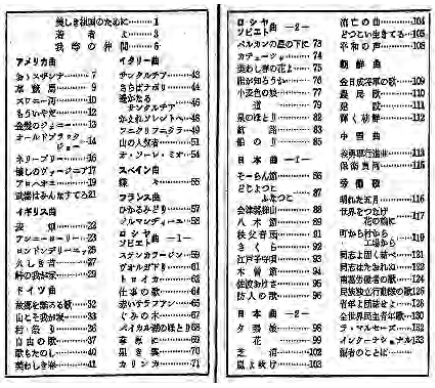
新宿と渋谷にあった歌声喫茶「カチューシャ」（ 1955開店）の歌集 1959発行　（筆者蔵）
〜起て飢えたる者よ〜の「インターナショナル」から、〜ここは御国を何百里〜の「戦友」まで、カオス状態

4 「夕張娘」

さて、お待たせの「夕張娘」。

売れに売れたという青年歌集第１篇収録の日本曲２（日本曲１は民謡）のトップが、「夕張娘」だ。

因みに日本曲１のトップは「ソーラン節」なので、北から順に並べただけかもしれないが…。



青年歌集第1篇の目次右ページ左下側に「夕張娘」

インターネットで「夕張娘」を検索しても、リリーズの他には「黒ダイヤばやし」（〝ツヤの良いのが自慢だよ　夕張娘と黒ダイヤ～）が出て来るだけ。

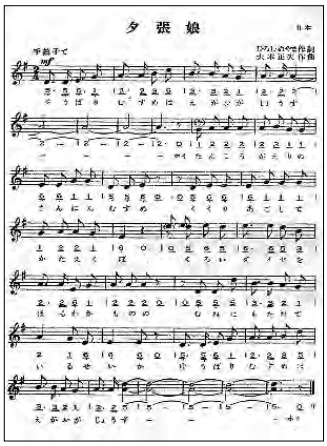
市制50周年・開基105年記念というレーザー・ディスク！の12曲にも、「ゆうばり小唄」から「新ゆうばり音頭」までで「夕張娘」は無い。

今でこそ人口は6,000人に激減しているが、最盛時に24の炭鉱があり、1960年に11.7万の人口を数えた市だ。娘さんの残り香位はありそうなものではないか。「青年歌集」からみてみよう。

1　夕張娘は笑顔が上手
　炭鉱がえりの三人娘　くくりあご[3]して片笑くぼ
　黒いダイヤを掘る若者の
　　胸にもたれているせいか
　　夕張娘は笑顔が上手
2　夕張娘はお色が白い
　鉱夫長屋でふりむく娘　おやじ先山[4]乱暴もの
　大熊ひぐまの出る山道で
　白樺ながめて育つたせいか（ママ）
　夕張娘はお色が白い
3　（略）

当時の炭坑労働歌は地元炭鉱マンの作が主流だったので[5]、夕張の炭鉱マンが作った歌かと想像していたが、作詞は「若者よ」で知られる“ぬやまひろし”、作曲は戦前から活躍していた“大木正夫”だ。

「青年歌集」は楽譜も載せていて、誰でも歌い易いように数字譜[6]も出ている。



五線譜の下が数字譜

現代の目からは歌詞にジェンダー問題が濃厚な点は措くとして、羆（ひぐま）（３番には雪）が出ては来るが、夕張固有の地名や行事などは無くご当地性が薄いことと、炭鉱や炭住を舞台にしているのに労働･生活の匂いに乏しい感は否めない。

全国を席捲（せっけん）した運動の最初の歌集に収められていたのに、忘れ去られたこの歌。

うたごえ運動初期の歌にしては平穏な日常性色が強いのは、イデオロギーそのままで堅苦しい闘争の歌の息抜きを狙ったもののように見える。

日本の復興を担う三大産炭地の炭坑節で、座敷歌として洗練され、1946年から放送されたNHKのラジオ番組「炭坑に送る夕（ゆうべ）」で全国ヒットしていた筑豊[7]と常磐の炭坑節に比べ、レコード化前の北海炭坑節（北海盆歌）は卑猥さが特徴だったから、健全な歌の世界には出て来られない[8]。

こうなると（勝手な想像になるが）、誰もが口にできる北海道の炭鉱の歌が欲（ほ）しくなるのは自然な流れではないだろうか[9]。

北海炭坑節とは名前の重なりを避け、民謡ではないものの民衆の生活に根ざした楽しい歌として作られた北海道の炭鉱の歌が「夕張娘」なのではないか。

前述のとおり夕張を舞台にした歌詞が無いので、炭鉱の町「芦別（あしべつ）」でも「赤平（あかびら）」、「三笠（みかさ）」でも良かったように見えるが、作詞・作曲者にとって、夕張炭田の炭

都夕張こそ北海道の炭鉱の象徴だったのだろう。

夕張は代表的産炭地で大都市、しかも、空知炭田に所在する町々とは異なり、炭田名＝都市名である。

歌の名にふさわしかったといえる。

しかし、この歌は特定の運動に伴う創作曲だということと「夕張」という固有名詞のタイトルが仇になってつぶしが効かなかったことに加えて、北海道の炭坑節が数年後に猥歌色を消した上、炭鉱までも除いた盆踊り歌に大変身することで全国ヒットしたのが、その後の運命の差に繋がったといえるかもしれない。

北海道では、炭鉱の閉山は地域社会の消滅に直結することが多く、地域にほぼ何も残すことは無かった。

殆どの人にとって、炭鉱は遺構で面影を偲ぶだけの存在になってしまっただろうが、文化運動という遺産を残したことを忘れてはならない。

現在、炭鉱の歌は、地元の盆踊りなどで歌い継がれているだけだが、かつては一般的な歌だった[10]。

ヘルメットにヘッドランプ、炭塵で真っ黒の顔に眼だけが光っているというイメージの内側には、豊かな精神世界が広がっていたのだ。

1948～50年発行の産業図案切手「炭鉱夫」

うたごえ～歌声が退潮していったのは、政治の季節が終わったからというより、一緒に歌う場、集う場を求める共通の想いが失われていったことによるものだろう。集団の時代の終りである。

カラオケに集まっても、歌うのは個人なのだ。

ところが、今、なぜか歌声喫茶の復権現象が起きている。定席は少なく、多くは曜日限定だが、昭和ノスタルジーというより、個の時代を通ったうえで、集団の楽しさ、人との触れ合いを求めていることの反映だろうと思える。

どの世界にもあることだが、良い歌だからといって、広く親しまれ歌い継がれていくとは限らない。

残念ながら「夕張娘」は、炭鉱の歌に関する著作やＣＤ等にも収録されておらず、この黒ダイヤは埋もれたままだ。

もし、夕張ゆかりの人の心にワンフレーズだけでも流れることがあれば、くくりあごの娘さんが夕張岳から素敵な笑顔を向けてくれることだろう。

ドンと掘れ　夕張娘！

＊

本稿は、夕張出身で北海道開発局OBの内川准一氏とその知己の方々のお力添えをいただきまとめることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

1）最も古い歌声喫茶は、三島由紀夫も通っていたという新宿の「どん底」（レストランとして現存）で1951年、「灯」は1954年開業。

2）「厚生」とは、当時のレクリエーションの訳語。体操、競技なども含む活動はドイツ労働者党の取組がモデルで「厚生運動」と言われた。

3）くくりあご＝括り顎　肉付きが良く二重になった顎。政府の産業政策もあって炭鉱は豊かだった。

4）先山＝さきやまとは坑道の先頭で採掘指揮する熟練鉱員。

5）道内では太平洋炭鉱の佐藤広志が有名。本稿で用いた「ドンと掘れ黒ダイヤ」は、1948年、北海タイムス（休刊）の前身新聞社が募集した石炭増産の歌の当選作。歌志内の炭鉱マンが作り、あの中山晋平が作曲して、全国放送された。

6）ハ長調のドレミは１、２、３。この歌はト長調なのでソラシが１、２、３。０は休符、下線無しは４分音符、一本線は８分音符など

7）筑豊の炭坑節の名は「炭坑節」。福岡県田川市の三井田川炭鉱が発祥の地だが、一部のレコードの歌詞などから三池炭坑節として広まったとされる。

8）「北海炭坑節」の元歌は「ベッチョ節」。ベッチョは太平側東北地方における女性器の俗称。歌詞も多くが卑猥だった。青年歌集では北海炭坑節以外の２曲が第２篇に収録されている。

9）1948年に日本青年共産同盟文化部が発行した楽譜では、「夕張娘」は今も多くの人が知っている「カチューシャ」とセットになっている。

10）第１回紅白歌合戦（1951.1.3　新年３日の開催）では紅白各組７曲だけの内、東西の炭坑節（三池と常磐）が対戦した。これは、1956.12の第７回でも再現されている。

北海道独自の文化遺産、「子供盆おどり唄」（本誌2023年１月号）がCD化されました。今年の盆踊りに是非どうぞ。